

# 十勝管内の二宮金次郎像データ分析・考察

(平成24年3月現在の調査時点でのデータによる分析・考察)

※( )内の数字は、像と台座はなくても文献などからその存在が確認できるもの(16体)を指します。(データ一覧を参照)

## 1 十勝管内の二宮金次郎像の個体数の分類と考察

- 個体数                                 ～ 60体(16体)
- ・台座のみ                                 ～ 5台
- ・台座の上にモニュメント         ～ 1台             合計 66体(16体)

〈考 察〉

現在確認できる十勝管内の二宮金次郎像の個体数は、60体となっている。像はなくても台座が残っているものや像と台座はなくても文献などからその存在が確認できるもの(16体)を含めると、82体にもものぼっている。この数字は、かつてはどこにでも見られたと言われる金次郎像を反映した数字であるかどうかは分からないが、多くの人々の記憶の中に金次郎像は確実に残っていることを考えると、(戦前は、「修身」の授業の中でも扱われたことを、考慮から省いても)像の果たした役割は大きかったと思える。

## 2 像の所在施設等の分類と考察(台座のみのものも個体数として数えた)

- 学校                                 ～ 58体(16体)
    - ・現在は、閉校している学校への建立も含む
    - ・閉校後移設した像は、当初の建立場所として数えた
  - 公園                                 ～ 2体(音更町金次郎ふれあい通り、土幌町遊水公園)
  - JA建物                                 ～ 1体(JAさらべつ本所内)
  - 飲食関係施設                         ～ 1体(幕別町十勝ヒルズ)
  - 生涯学習施設                         ～ 1体(豊頃町える夢館)
  - 個人宅                                 ～ 1体(土幌町鈴木洋一様宅)
  - その他                                 ～ 2体(豊頃町教育委員会教育長室、新得山新八十八ヶ所御水堂)
- 合計 66体(16体)

〈考 察〉

多くの金次郎像が、学校に建立されたことが分かる。修身の教科書に掲載されていたこととも関わると思うが、「報徳のおしえ」は、時代を担う子どもたちに身につけるべき必要な項目(徳目)だと考えられていたと思われる。尚、像と台座はなくても文献などからその存在が確認できるものである16体は、全て学校に建立されていて、その数を含めると約89%もの金次郎像が、学校に建立されている(た)ことになる。地域・社会・学校などでの教育一部分が、報徳に傾注していた様子が伺える。

### 3 建立年別の個体数の分類と考察(台座のみのものも個体数として数えた)

○昭和 元年	～	9年	1体 (1体)	
○昭和10年	～	19年	43体 (14体)	
○昭和20年	～	29年	4体 (1体)	
○昭和30年	～	39年	7体	
○昭和40年	～	49年	0体	
○昭和50年	～	59年	2体	
○昭和60年以降			2体	
○不明			7体	合計 66体 (16体)

※旧像と現像の建立がある場合は、旧像の建立についてのみ集計対象した。

#### 〈考 察〉

像の建立は、昭和10年台が多くなっていることが分かる。像と台座はなくても文献などからその存在が確認できるものである16体の中の14体も、昭和10年代の建立となっている。像の建立の増減だけで判断できることではないと思うが、その年代は社会的にも時代的にも報徳を必要としていたことや報徳の普及・啓発などに力が注がれていたことが想像される。

### 4 寄贈・寄附・建立者等の分類と考察(台座のみのものも個体数として数えた)

○個人	～	29体 (7体)	
・複数人であっても親族の関係にある場合は、個人として数えた			
○有志	～	13体 (1体)	
○団体	～	10体 (2体)	
○不明	～	14体 (6体)	合計 66体 (16体)

#### 〈考 察〉

寄贈・寄附・建立者等の分類は、以上ようになった。個人・有志・団体などによって建立されているが、それぞれの思いや願いだけで、学校を中心とする所に建立できるものではないと思われる。学校であれば設置者(地方自治体)や地域の人々などの意向も入ることが想定される。それが、全国の学校を中心とする場所で金次郎像が建立されたことを考えると、国・地方自治体(学校などの設置者)・地域の人々と像を寄贈した人々や団体が同じような「尊徳観・報徳観」を持っていたと思われる。その是非や価値観が同じ(統一的な)ものになっていることなどに関わる考察は馴染まないと思われるので割愛するが、そのような状況下で金次郎像の建立が進んだものと思われる。

### 5 像の材質の分類と考察

○コンクリート製	～	19体	
○銅製	～	30体	
○陶器製	～	10体	
○磁器	～	1体	合計 60体



## 「二宮金次郎像の調査・研究」改訂版の発行を終えて

最初に、今回、「十勝管内二宮金次郎像の調査・研究」の改訂版を、発行することに至った経緯や要因に触れて述べてみたい。

昨年度（平成22年度）発行した「十勝管内二宮金次郎像の調査・研究」の中でも述べたが、管内の金次郎像の建立に関わって記された文献は、金次郎像が建立されている施設や建立した団体の沿革史やそれに関わる文献などにうかがい知ることができる。事実、昨年度の時点でも、その幾つかの資料を入手していて、参照して記述した部分もあった。

しかし、そのことは分かっているにもかかわらず、実際にそれらの文献等を探し求め詳細に調べることは、非常に困難だと思われた。調査と研究にあたり、「そこまでは、出来ないであろう」との内部での確認の許で調査や研究が行われ、冊子の発行の運びとなった。

発行後、一定の反響があり、否定的な評価はなく肯定的な評価を得たように思う。しかし、幾つかの加除や修正を必要とする指摘をいただいた箇所もあった。その指摘の多くは、前述した金次郎像に関わる文献などに基づく、具体的且つ詳細にわたる指摘であった。事実に基づいて予断を可能な限り排して発行したのであるが、客観的だと思われる資料の事実を前にして、内容に整合性を保つことが出来なくなった部分も多いと思われた。このことは、今回の改訂版を発行することに至った要因の一つとなった。そして、何よりも新たな金次郎像の発見も数体あった。

反響の主なものは、「これまでにないものだ」と言うことに集約される。確かに、管内的には前例のない内容のものではあるが、それだけに不都合や不整合があってはいけないことでもある。管内での反響ばかりではなく、幾つかの管外からのものもあった。いずれもマニアックな方からのものと思われるが、本書の影響や役割の大きさを改めて知るような思いもしたし、更に客観的な事実や資料に基づいて、より精確に記述し、発行すべきであったとの思いも残った。それが、社会性を有する刊行物の果たすべき責務であるように思われる。（そんな大袈裟なことでもなくとも、いくらかの反響には、正対する姿勢も内容も必要だと思われた）

今回の改訂版の発行は、以上のことを主な要因として、それを踏まえての調査と研究に心がけた。調べる方法として、記述されている文献が多く所蔵されていると思われる市町村立図書館（室）を中心に、実際に訪れて直接に調べることを念頭に置いた。闇雲に文献を当たって調べるとは不毛だと思われることから、市町村史や学校開校（閉校）記念誌（沿革史）、地域史（郷土史）とそれに類する文献に絞って調査した。その結果、私が調べた文献だけでも354冊に達した。また、浦幌町教育委員会のように、同町の文献を調べて、資料を提供して下さったところもあったので、更に、いくらかの文献が加算される。この資料などに基づいて、調査と研究を進め改訂版を記述した。新たに知りえたことは数知れずあったが、課題となることも当然のように生じてきた。新たに知りえたことは、記述の中で加除し修正したが、課題となる主なことは、列挙すると以下になる。

- 1 明らかに金次郎像が存在し、或いは存在していたにも関わらず、関係する文献の中に記述がなかったり、文献そのものがなかったりすることもあった。（要するに、調べようがない）
- 2 1に関わって、学校開校周年（閉校）記念誌が必ずしも発行されていないことや、発行されても図書館などに所蔵されていないことに起因して、調査が出来ないものもあった。（閉校となった学校に縁がある方に照会したところ、自宅で学校の閉校記念誌が見つかり、貴重な情報を得ることが出来たこともあった）
- 3 記述してある複数の文献の中には、異なる記述をしている内容も見られた。（このような部分は、記述の中で、併記するようにした）
- 4 2に関わって、文献や資料を得るには、関係者と思われる方に個別に当たることなども考えられるが、そこまでの調査は、明らかに困難であると思われる。（資料を収集し切れないという課題）

前回の発行では、資料の収集が不備であり、従って記述の内容に限界もあったことを改訂版発行の要因の一つとして挙げて、その解消を第一義的に考えて解決するように取組んだ。結局、現時点での最善を尽くしたと考えたいが、今回の改訂でも、資料等の入手が困難であり、十分とは言えない内容になったことは否めない。

それでも、敢えて改訂版を発行したことの意義を考えると、以下のようになる。

- 1 現時点での調査に限界を感じながらではあったが、多くの方々の協力もあって、金次郎像に関わる相当数の資料や情報を収集することが出来た。
- 2 昨年度版で不明であった部分が、今回の調査と研究により、相当の部分の実態や内容を明らかにすることが出来た。
- 3 今後、新たな文献などが発見（発掘）され、より詳細な管内の金次郎像の実態が明らかになると思われるが、そのための礎となることが期待される。

新しく金次郎像が建立されていることも事実であるが、閉校し廃校となった学校に残されている金次郎像は、訪れる人も少なく寂しく佇み、風化が徐々にではあるが確実に進んでいるように思われる。事実、この調査の最中にも、台風の影響で朽ちた金次郎像が撤去されている。

戦後の日本の急激な復興を見て世界の人は、「日本人は、勤勉である」と絶賛していた。今でも、大震災に関わって、「日本人は、優秀で勤勉だから、必ず日本は復興する」との外国の方のコメントが、テレビの報道番組などで見聞きすることがある。本当にそのようになると嬉しく思うが、それには終戦直後の時期と同じくらいかそれ以上の「勤勉さ」を、現在の日本人が持っているかどうかによるものだということを考えると、「果たしてそう旨く行くのだろうか」と疑問に感じるのは、私だけではないと思うが如何であろうか。

私見であるが、戦後のみならず戦前であっても、「日本人は、勤勉だった」と思う。流行の考え方をするとDNAに組み込まれたものもあるかも知れないが、尊徳の説いた「報徳のおしえ」が少なからず影響していると思っている。尊徳の死後、多くの弟子たちが、全国の経済的に困窮した人や疲弊した地域などを救済すべく散り行き、「報徳のおしえ」を実践していったという。全国に結成された報徳社（会）は、一時は千社を超えた時期もあったということから、その数だけ「報徳のおしえ」が、地域などの実態に合わせ根付いて実践（仕法）されていたことになる。

因みに、金次郎像の建立に、報徳社（会）に関わる事例も見られた。しかし、報徳社（会）は、金次郎像を建立するために結成された訳ではなく、前述したように、経済的に困窮した人々や疲弊した地域などを救済することが本務であった。金次郎像の建立は、実践を通して「報徳のおしえ」の価値が体得（見出）され、その価値を後世に継承する意図もあったものと想像される。その結果の建立だったと仮定して考えると、「報徳のおしえ」は、広く人々の中に根付いたものとなっていたとも想定される。これを実証できる程の資料や研究などは持ち合わせていないので、「風が吹けば、桶屋が儲かる」式の勝手な論理になっていると思うが、「日本人は、勤勉である」とことと「報徳のおしえ」の関わりを否定するものも、現状では見当たらないと思っている。

豊頃町教育委員会は、平成10年6月に、「今こそ『報徳』」という冊子を発刊している。表紙には、「報徳のおしえを理解し『心田の開発』に基づく町づくりをすすめるために」と書かれていて、分かり易く報徳が解説され、「心田の開発」構想（心田塾構想＝生涯学習体系構想）が述べられている。現在、この構想自体は既に廃止されているが、理念は残り「心田の開発」は、生涯学習者たる個人々に委ねられている。報徳のおしえは、自然や他者（血縁関係を含む）との関わりの中で生み出されたものであることを考えると、個人々の点としての「心田の開発」とそれに基づく実践は、必ず自然や他者と関わりを持ち、やがて線として結ばれ面として発展していく性質を持つべきものであると考えたい。そうなることを願って、後書きとします。

平成24年3月

豊頃町教育研究所生涯学習部長 永井祥次

十勝管内における二宮金次郎像の調査・研究  
(改訂版)

発 行 平成24年 3月  
発 行 者 豊頃町教育委員会・豊頃町教育研究所  
〒089-5392  
中川郡豊頃町茂岩本町166番地  
電話 015-579-5801  
編 集 豊頃町教育研究所生涯学習部